

本業務の概要と進め方について

環境省自然環境局自然環境計画課

平成26年2月25日

資料1-1. 本業務の概要

■検討の背景

▼これまでの議論の経緯

- ・社会構造が変化し、人口減少が進む中、すべての里地里山を人手をかけて、かつてのように保全していくことは困難であり、保全すべき対象とその将来像を明確にし対策を講じていくことが重要な課題。
- ・これまで、地域の取組(グッド・プラクティス)に着目し、それらを拾い上げて広めることで、ボトムアップによる取組促進を図ることを国の役割とし、地域の個別活動の活発化のための基盤となる仕組みや枠組みについて検討を進めてきた。
- ・地域の活動の活発化、SATOYAMAイニシアティブの提唱など、里地里山保全に向けた機運が高まる中、それらの成果を束ねるものとして「国土レベルでの里地里山保全のビジョン」の必要性が指摘された。

▼H24年度検討会議における検討内容

- ・国土レベルでの里地里山保全のビジョン(=グランドデザイン)検討の枠組み
- ・次世代に継承していく里地里山について考慮すべき視点・条件

【H24検討会議で出された主な意見(検討課題)】

- *「**白地地域**」での**重要な里地里山選定のための評価の基準・手法の検討**
→保護地域等の指定がされていない「白地地域」でも生物多様性保全上重要な里地里山として選定されるようにする。
- * **重要な里地里山を核とした国土の生物多様性保全にかかる考え方の明確化**
→コアとなる里地里山の面積確保、国土配置の観点が重要。
- * **選定された地域への具体的な保全管理方策の検討**
→地域選定は、具体的な保全管理方策とあわせて検討。国と地域、関係省庁など、各主体の役割分担・連携を意識。

■「生物多様性保全上重要な里地里山(重要里地里山)」の選定

(選定の目的)

生物多様性保全に取り組むことが国家的・社会的課題とされる中、国土の生物多様性保全の観点から重要な地域を明らかにし、これを核に生態系ネットワークの構築も視野に入れ「国土レベルでの里地里山保全」を進める。

(名称・選定の方法)

国土レベルの生物多様性保全の観点から、特に保全の必要性が高い地域を「生物多様性保全上重要な里地里山(重要里地里山)」として選定する。

「重要里地里山」は、科学的手法と専門的知見に基づいて選定されるものである。

(保全活用の方向性)

選定された里地里山は、各地域の現状・課題を踏まえた既存の政策も含めた保全活用方策の検討に資する地域であるとともに、別途検討されている「重要海域(里海含む)」「重要湿地」などとのつながりを考慮した生態系ネットワークの核となる地域として、重点的に保全活用策を講じる。

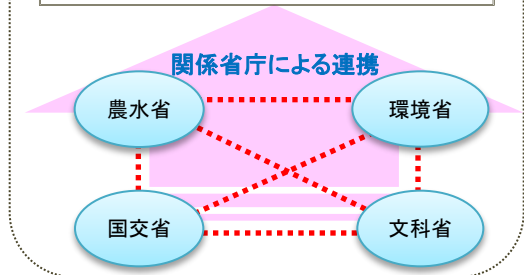
なお、選定地は、その保全活用の状況に応じて、適宜見直し・フォローアップを行うこととする。

【「重要里地里山」の保全活用】

■里地里山の多面的機能の発揮

- ・地域の環境と調和した持続的な農林業の場
- ・新たな産業の創出
- ・地域特有の伝統的な生活文化や景観の保全
- ・教育や観光、自然とのふれあい、交流の場
- ・里地里山特有の生物(多様性)の保全
- ・国土保全、環境保全

等



<目指す姿>

★保全対象となる里地里山が明らかになることによって、地域レベル、国土レベルでの里地里山の保全活用への理解の進展、保全活用の取組が促進し、国土の約4割を占める里地里山のうち、できる限り多くの里地里山を健全な状態で次世代に引き継いでいくことが可能となる。

★里地里山を国土の自然環境の骨格をなすものの一つとして位置づけ、「森・里・川・海のつながり」を確保した生態系ネットワークを構築する。

資料1-2. 選定のための検討会(拡大検討会議)の開催

選定作業の透明性、客観性を確保しつつ、科学的な視点で「重要里地里山」の評価・選定を進めるため、従来の「里地里山保全・活用検討会議」(以下、「検討会議」)の構成委員に、不足すると考えられる自然科学の分野から新たに3名の委員を追加し、拡大検討会議という位置づけで検討を行う。

【会議の名称・構成】

会議名称は、「里地里山保全・活用検討会議」のままとし、従来の検討会議の委員10名に専門委員3名を加え、有識者計13名の構成で開催する。

【検討内容】

- ・拡大検討会議では、検討会議で事前に検討された選定の考え方・枠組みを踏まえて、候補地の抽出、確認・評価を行い、「生物多様性保全上重要な里地里山(重要里地里山)」を選定する。
- ・併せて、「重要里地里山」の保全活用に向けた課題の検討を行う。

【その他】

- ・拡大検討会議は、平成25年度の第3回検討会議から平成26年度(全3回を予定)まで開催するものとして、本年度は、第1回拡大検討会議という位置づけで開催する。
- ・事務局は、候補となる里地里山について、選定委員や地域協力者の協力のもと情報提供・収集などを行い、選定の準備・とりまとめの作業を行う。

【検討委員(五十音順、敬称略)】 ★は平成25年度第3回検討会議より参加

| | |
|-----------|----------------------------------|
| あん・まくどなるど | 上智大学大学院地球環境学研究科教授 |
| 石井 信夫 ★ | 東京女子大学現代教養学部数理科学科教授 |
| 石井 実 | 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授 |
| 岩槻 邦男 | 東京大学名誉教授 |
| 金井 裕 ★ | 公益財団法人日本野鳥の会参与 |
| 進士 五十八 | 東京農業大学名誉教授／自然再生専門家会議委員長 |
| 竹田 純一 | 東京農業大学農山村支援センター事務局長／里地ネットワーク事務局長 |
| 中越 信和 | 広島大学大学院国際協力研究科教授 |
| 広田 純一 | 岩手大学農学部教授 |
| 松井 正文 ★ | 京都大学大学院人間・環境学研究科教授 |
| 宮林 茂幸 | 東京農業大学地域環境科学部教授 |
| 森本 幸裕 | 京都学園大学バイオ環境学部教授／京都大学名誉教授 |
| 鷺谷 いづみ | 東京大学大学院農学生命科学研究科教授 |

資料1-3. 本業務の進め方(スケジュール)

平成25年度

第1回、第2回検討会議
【開催済み】

第3回検討会議
【H26. 2. 25(本日)】

【候補メッシュ抽出(全国统一基準)】

平成26年度

第1回検討会議
【H26. 7月下旬予定】

【候補メッシュ抽出(地域特性考慮)】
【候補地抽出】

第2回検討会議
【H26. 10月下旬予定】

【候補地の選定】

第3回検討会議
【H27. 2月上旬予定】

【「重要里地里山」最終選定】

公表

<主な検討項目>

- 「重要里地里山」選定の考え方の整理
- 「重要里地里山」の選定基準・指標・評価方法(案)の提示

- ベースとなる里地里山メッシュデータの検討
- 「重要里地里山」の指標、選定基準の確認
- 指標を用いた評価方法の検討(全国レベル)

候補メッシュ抽出

↓
地域特性整理、地区の特定

- 地域特性を考慮した選定基準、評価方法の検討(地域レベル)
- 候補地区の情報の確認(所在地、評価のポイント等)、整理が必要な属性情報の確認(取組状況、継続的な担い手確保の可能性、地域が抱える課題等)

↓
地域情報の補足

(地方自治体等を通じ上記属性情報を聞き取る)

※自治体への情報提供及び提供依頼は、都道府県を通じて行う

- 候補地の検討(候補地の属性情報確認、情報整理を踏まえた選定地の精査等)
- 「重要里地里山」保全活用の課題抽出

↓
「重要里地里山」公表に向けた情報整理

- 「重要里地里山」選定地最終確認
(選定地および公表情報等)

参考資料. 第1回、第2回検討会議での主な意見

これまでの会議でご意見・ご指摘いただいた内容については、以下のとおり。
これらの意見・指摘を踏まえ、今後のスケジュール、作業方針等を検討した。

| 項目 | 主な意見 |
|---------------|---|
| 名称 | <ul style="list-style-type: none">・生物多様性は重要な要素だが、里地里山の重要性はそれだけではない。ここで言う「重要里地里山」が、生物多様性の観点で科学的に決めるものであることから、その旨の説明が必要。・一般的な「里山」のイメージとのギャップがあるため、言葉の使い方や発信の仕方に留意してほしい。・何年も検討してきたことが後退してはいけない。科学的に三つの観点から「重要里地里山」を選定したと言ってしまっていていい(ある意味、レッドリスト掲載種の選定と同じ)。 |
| 選定の観点 | <ul style="list-style-type: none">・選定基準に「継続性」や「人との関わり」に関するものが入っていないため、里地里山を選んだと言えないのでは。・土地利用や生物相は、自然と人との関係を色濃く反映しているものであり、それらを指標として里地里山を評価することは、良好な状態・人との関係が保たれている里地里山を選ぶことにもつながっている。 |
| 選定のプロセス | <ul style="list-style-type: none">・選定して公表するプロセスの中で、地域(特に自治体)への情報提供を行ってほしい。一方的な選定、公表では、地域の理解・協力は得られにくい。・事務局レベルでの科学的データ処理だけで進めていくのではなく、各委員の専門的知見も活用しつつ、より地域に即した形で選定が進められるとよい。・まず全体をつくっておいてから、次の議論(地域特性の考慮)を行うのも一つの方法。足りない部分は、適宜補えるようにしておくことが大切。 |
| 選定方法 | <ul style="list-style-type: none">・相観と植生自然度の情報に基づいて植生凡例を統合・再分類している最新の土地利用データがある(国環研作成)。50m四方のセルを用いることで、日本特有のきめ細かい土地利用を反映できる。・現存の里地里山メッシュ抽出基準では、例えば東北地方の北上山地あたりは抜け、中国地方はたくさん選ばれるなど、地域間で偏りがみられる。・「二次草原」は保全の優先度が高いが、植生自然度4・5も全てが重要というわけではない。また、現存の抽出方法では小規模なものは落ちてしまう。 |
| 「里海」の扱い | <ul style="list-style-type: none">・「重要里地里山」として「里海」は対象としないのか。対象としない(別途検討する)のであれば、そのように注釈を入れておくことが必要。 |
| 生態系ネットワークについて | <ul style="list-style-type: none">・日本の里山はバッファーとしての役割が大きいため、広域的な連続性をみる必要があるが、議論が詰まっていない状態でそのような作業は困難では。・生態系ネットワーク構築にあたっては、水系、流域にも着目すべき。・データ上で動物の生息範囲はどこまで考慮されているのか。里地里山を利用する動物の移動距離などを参考に連続性を確保できるとよい。 |